

明治25年～昭和19年

生田 正輝

1 体育会前史

慶應義塾体育会は明治25年5月に創立されたのであるが、『慶應義塾五十年史』にも「義塾体育会の組織的に設置せられたるは、近來の事なるも、其歴史を尋ねれば、頗る早きものあり……」と記されているように、その歴史はさらに古く、義塾が新銭座にあった頃までさかのぼることが出来る。そのような意味において、体育会が正式に発足するまでに、すでにかんりの間にわたる体育会前史ともいふべき歩みがあったのである。

教育において、人間形成の一助としてスポーツを重視することは、義塾創立以来の基本的な方針であり、福澤諭吉の考え方でもあった。諭吉は「まず獣身を成してのち人心を養う」という立場を強調しているが、自らも居合、乗馬、散歩などを絶えず実行するとともに、塾生にも運動を奨励した。すでに、芝新銭座当時の義塾の規則書には、「午後、晩食後は、木のぼり、玉遊等、ジムナスチックの法に従い、種々の戯を為し、勉めて身を運動すべし」と定めており、中庭を運動場とし、「ブランコ」などの運動施設用具を備えつけていた。

明治4年に義塾が三田に移転した後は、さらにいろいろなスポーツが加わって来た。すなわち、明治5、6年頃からは馬術が行われ、剣道、柔道、さらには器械体操も取り入れられるようになったが、これらは時に消長があったものの、塾生の間に盛んに行われるようになった。そうして、明治17年に至って、米人ストーマーの指導によって野球が導入され、明治22年には「三田ベースボール倶楽部」に発展した。また、同年春には、塾生によって

端艇倶楽部が組織され、品川、袖ヶ浦などで練習を行った。このようにして、日本古來の武道に加えて、西洋のスポーツも取り入れられるようになり、塾生の間にスポーツはますます盛んになって行ったのである。

こうした状況の進展によって、義塾の当局者、先輩、塾生の間に、これらの運動団体を統一し、組織的にさらに発展させる必要が感じられるようになり、明治25年5月に至って、ついに「慶應義塾体育会」が発足したのである。爾來、体育会は100年の長きにわたって、さまざまな変遷を経つつも、実に輝かしい歴史を歩み、誇るべき伝統を築きあげて来た。それは、体育会が単なるスポーツ団体としてではなく、創立以前からの慶應義塾の一貫した方針に従い、つねに義塾の教育の一環として、義塾の中核として存在し続けて来たことによるといわなければならない。また、慶應義塾の歴史の上で極めて大きな足跡を印して来た体育会は、数々のスポーツのパイオニアとしての榮譽をにない、日本のスポーツ界においてもまことに重要な役割を果たして来たことも事実である。

2 体育会の創立と明治期の発展

明治25年5月、柔道、剣道、野球、端艇の4部を統合するとともに、新たに弓術、操練、徒歩の3部を設け、7部をもって組織し、福澤捨次郎を会長として、「慶應義塾体育会」が創立された。明治25年5月15日の義塾評議員会の記録には、その間の事情について、次のように記されている。

「運動倶楽部設立の爲、創立費及び基本金壹千円を支出し、之が経費として学生一般より

毎月拾銭づつを納めしむる事。

但し運動倶楽部規則は別に之を定む。而して是迄の春秋運動会費を此の倶楽部に給与して春秋2回の運動会を催さしむる事。」

設立の当時の体育会の役割と義塾のそれに対する期待とが、自らうかがわれるであろう。

その後の明治時代においては、さらにいろいろなスポーツが導入され、盛んになって来るにつれて、体育会に加入する部も次第に増加して来た。明治31年頃から塾生の間でテニスを行うようになり、たちまち盛んになり、清遊ローンテニス倶楽部、三田ローンテニスクラブ、ABCクラブ、窮狸窟クラブ等の同好クラブが生まれたのであるが、明治34年10月に至って、これらを統合して庭球部として体育会に加盟した。

さらに、明治20年頃に創立されたといわれる水泳クラブが発展し、明治35年7月に葉山において第1回水泳練習会を開いて本格的な組織となり、8月には水泳部として体育会に加盟するに至った。明治35年には塾員有志によって「自転車倶楽部」が組織され、翌36年に塾生のみが自転車部として体育会に加盟したが、これは1年たらずして廃部となった。また、明治35年に有志によって器械体操の倶楽部が結成された。これまた、翌36年に器械体操部として体育会に加盟したが、「其技都下に比敵するものなき有様」であったという。

明治32年には、塾の英人教師クラークによってラグビーフットボールが塾生に教えられたが、これによって初めてわが国にラグビーが導入されたのである。当時は試合の相手もなく、もっぱら横浜の外人チームと試合を行っていたが、明治44年4月6日に綱町グラウンドで第三高等学校と試合を行ったが、これがわが国におけるラグビーの対抗試合の始まりである。塾生の間に次第に盛んになって来たのであるが、明治36年には蹴球部として正式に体育会に加入した。

なお、この間にあって、明治26年には徒歩部が廃止され、兵式体操及び野外演習などを行っていた操練部も明治29年に廃止されたのである。

このようにして、明治期において体育会は次第に発展したのであるが、その間の事情は次のような『慶應義塾五十年史』の体育会に関する記述からも推測し得るであろう。剣道部については、「今は部員の数、百名に近く、竹刀相打つ音、日として断ゆる事なし」と、柔道部については、「部勢彌々隆盛にして、有段者廿余名、有級者八十数名、無級者に至りては、今や三百名に達せんとす」と、野球部については、「今や天下に其技を角し得る者なし、部員の数、百五十名余り」と、さらに端艇部についても、「部員総数実に千三百余、以て其盛大の状を想見することを得可し」と記されている。

また、弓術部の部員は200名、庭球部も200名に近く、フットボール部(蹴球部)は150名、水泳部も100名、器械体操部も150名の部員を擁したと述べられている。いかに1人で多くの種目を行うことが認められていたとはいえ、それぞれの部が実に多くの部員を集めていたことが知られるのであり、体育会の隆盛のほどが肯けるであろう。

しかも、体育会はこのように多数の部員を擁したということに止まらず、各部ともにめざましい活躍を行った。なかでも注目すべきは、後に天下を熱狂させるに至った慶早野球戦が明治36年に始まったことである。これは39年に至って、余りにも両校学生の対立が激化し、不測の事態が生ずる恐れがあるとして、ついに中止されるに至った。その後、野球部は、40年にはハワイ・セントルイス大学の、42年にはウイスコンシン大学の野球選手を招いて試合を行い、41年にはハワイ・セントルイス大学の招きに応じて初の米国遠征を行うなど、米国との対抗試合によって活路をひらいた。

そのほか、44年には蹴球部が第三高等学校との定期戦を開始したことは前述したが、端艇も38年には慶早ボートレースを始めた。

さて、このようにして高橋誠一郎の言を借りれば、「此の頃は運動熱が全塾に漲って居りました」というような状況であったが、そのなかで体育会の施設、設備も大いに充実して

いったことも記述しておかなければならないであろう。とくに、それまではほとんど三田の稲荷山下の運動場を中心に練習、試合が行われて来たわけであるが、義塾の発展に伴う教室等の増築により手狭となった結果、明治36年に至って三田綱町の蜂須賀侯邸地の一部、3874坪余りを運動場用地として購入することが、義塾評議員会において議決されたことは注目に価する。その後、綱町グラウンド、柔道場、剣道場、弓道場、器械体操場等が着々と整備され、体育会の発展に大きく寄与することとなった。

綱町グラウンドは、第1回の慶早野球戦、日本最古の第三高等学校とのラグビー定期戦、わが国初の有料野球試合を始めとし、数々の記念すべき試合や名勝負が展開された地として、塾内外の多くの人びとの記憶になお強く止まっているはずである。

3 大正期の体育会

慶應義塾体育会は、慶應義塾の発展とともに、大正期に至っても引き続き着実な前進をとげて来た。この時代に入って、体育会には、競走部、相撲部、山岳部、ホッケー部および馬術部の5部が新たに加入した。これらの各部は、それぞれにかなりの歴史を刻んで来たのであるが、それらの加入によって、体育会は傘下に14部を擁するに至ったのである。

明治43年には、他校の競技会や運動会に招待された場合に、派遣する選手を人選するために徒歩世話係をおき、体育会直轄の徒歩部(部として独立したものではない)というものを設けたが、これが実は競走部の前身である。爾来曲折を経たが、大正6年に至って競走部として体育会に正式加盟し、第1回の試走会を開催したのである。

相撲については、福澤諭吉在世中から、すでに寄宿舎内に相撲協会なるものが組織され、素人相撲を行っていたが、これは一時衰えた。明治36年頃に至って、再び同じ寄宿舎内に相撲倶楽部が結成されて次第に盛んになったが、45年には横綱常陸山を招いて、稲荷山で土俵

開きを行うまでに至った。さらに、大正8年に至って、栃木山、大錦を招いて、綱町の新土俵開きを開催するとともに、ついに相撲部として体育会に加入した。山岳部は、大正4年に山岳会として創設されたが、次第に充実し、8年には体育会に加盟した。

ホッケーもかなり歴史は古く、明治39年にイギリス人牧師グレーが来塾し、塾生にそれを紹介し、指導したのがわが国のホッケーの始まりで、その11月にホッケークラブが創立された。しかし、その試合の相手は横浜の外人チームしかなく、さまざまな困難があったが、次第に塾生の間にも浸透し、ついに大正8年にはホッケー部として、体育会に正式加入したわけである。

馬術については、前述したように、すでに明治5、6年頃から市中より馬を借りて練習が三田山上で行われていたといわれ、かなり古い歴史をもっている。しかしながら、乗馬会が設立されたのは大正9年に至ってからであり、それが発展して11年には馬術部として、体育会に正式に加入したのである。なお、大正2年には、庭球部が他校にさきがけて、硬式の採用を決定した、ということも付記しておかなければならないであろう。

このように躍進しつつあった体育会は、義塾においてますます重要性を増し、大きな期待を寄せられるようになった。と同時に、対外的にも華々しい活動を展開し、ことに国際的に進出するに至ったことは注目しなければならない。すなわち、大正9年にアントワープで開催された第7回オリンピック大会には、義塾体育会から熊谷一弥(テニス)、益田弘(陸上)の二人の塾生を、日本代表選手として送った。また、大正13年のパリーでの第8回オリンピック大会にも、原田武一(テニス)、益田弘(陸上)の二塾生が日本代表選手として出場したのである。

これらの事実によって、庭球部、競走部のレベルがいかに高くなっていたかが伺えるのであるが、同時に義塾体育会の国際的な舞台への進出が特筆されるのである。このほかにも、大正14年には、蹴球部がわが国のラグビ

一としては初の海外（上海）遠征を行ったことも、そのような意味において注目されるのである。

さて、大正期においては、義塾体育会の発展の上でとくに取り上げなければならない、二つの大きな施設の整備が始まった。その一つは、大正13年には、新たにグラウンド用地として、荏原郡矢口村に14250坪余の用地購入が決定され、新田運動場が建設された、ということである。ここには、収容人員15000人の観客席をもつ新田球場を始め、ラグビー、ホッケーなどのグラウンドが整備され、日吉移転に伴って整理されるに至るまで、体育会の活動の中心となったのである。

もう一つは、大正15年に、富士山麓土地会社社長堀内良平らによって、山中湖畔の土地約2万坪が運動場用地として寄付されたことである。その後、数度にわたって隣接地を買収した結果、昭和50年には27317坪を数えるに至ったが、この地に山中山荘と呼ばれる体育会の合宿所および数面のグラウンドを建設したが、これまた、体育会に属して活動した多くの塾員の思い出の地となっており、体育会の発展に極めて大きな役割を果たしたことは否定し得べくもない。しかも、これらの施設や設備の充実が、篤志家や先輩たちの努力に大きく依存しているということも、また、忘れることは出来ないと思うのである。

4 昭和戦前期の体育会

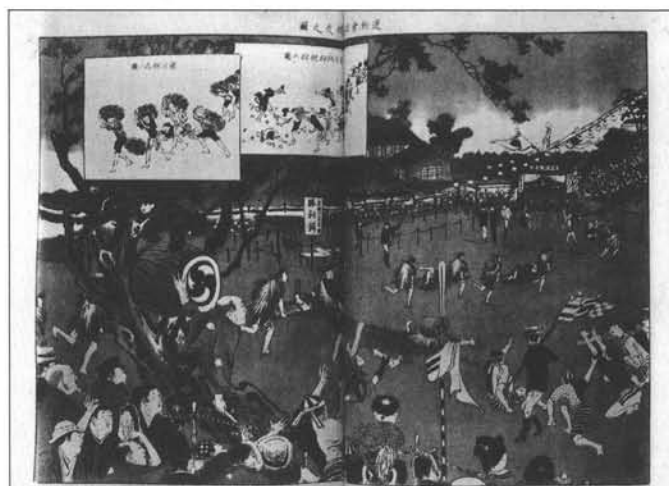
昭和期に入ってから、体育会はますます拡充され、著しい発展を示したのであるが、やがて第2次世界大戦が激化するに伴って、昭和17、8年頃から次第に衰退せざるを得なくなり、ほとんど休止状態に陥った。昭和18年の学徒動員によって大半の塾生が応召し、大学自体が壊滅状態にあったわけで、それも致し方なかったのであるが、昭和初期の体育会の発展がめざましいものであったことを忘れることは出来ない。

この時期においても、すでに大正期から同好の塾生たちによって手がけられて来た新しいスポーツが充実し、次々と新しい部として体育会に加盟した。その第1はサッカー部であり、大正10年に組織されたブル・サッカー倶楽部が11年には慶應アソシエーション・フットボール倶楽部となったのであるが、昭和2年に至って、正式に体育会に加入したのである。また、大正12年に山岳部の有志によって組織されたスケーティング・アソシエーションが、同じ昭和2年にスケート部として体育会に加入した。

さらに、大正13年に箒球クラブとして創立されたバスケットボール部も、昭和6年に至って体育会に加入した。また、同じ大正13年に唐手研究会として発足し、昭和4年に「唐



明治時代の大運動会。



手術」を「空手道」と改めるとともに空手研究会となり、翌5年体育会塾内対抗競技部が設けられるにおよんで、最初の新種目団体空手会となるという歴史を歩んだ空手部が、昭和7年に体育会に正式に加盟した。

大正6年から山岳会員の間でスキーが始められたが、14年には三田スキー倶楽部が発足し、昭和6年には新種目団体となり、9年にはついに体育会に加入するに至った。さらに、昭和12年には卓球部が、翌14年にはヨット部がそれぞれ新たに加入した。卓球部は大正10年に組織された慶應卓球倶楽部を前身としており、ヨット部は、大正初期より水泳部内において行われていたが、昭和11年に至って水泳部から独立した慶應ヨット・クラブから発展したのである。

昭和10年代の後半となり、戦時状況が厳しくなってきたなかで、昭和16年に射撃部とバレーボール部が体育会に加盟した。義塾における射撃の歴史は古く、すでに大正13年に慶應義塾射撃会が組織されていたが、後に中断し、昭和4年に復活し、16年に至って射撃部として加盟した。バレーボール部は、昭和6年に発足し、翌7年に新種目団体となった慶應義塾排球倶楽部がその前身である。

さて、昭和5年に体育会に塾内対抗競技部が組織されたことに注目しなければならない。義塾全般の運動を助長し、春秋の運動会などを開催することも、その設立に際して慶應義塾体育会の役割の一部であったことはすでに述べたが、同様の趣旨にもとづいて、体育会が単に各部部員の部活動のためのみの存在ではなく、広く全塾生の体育活動を指導し、奨励するための活動を行うべきであるとし、そうした活動の推進のために、この部が設けられたのである。その活動は水、陸上運動会や各種の塾内対抗競技会の開催、塾内競技団体（いまだ体育会に部として正式に加入していない新種目団体、すでに部が存在する種目の部以外の所属、公認団体、四谷医学部等の競技団体）の助成、山中山荘などの施設の運営など多方面に及んでいるが、それによって体育会の存在はさらに重要なものとなったこと

は明らかである。

この昭和戦前期において、体育会の施設、設備は飛躍的に拡充し、面目を一新するに至った。すなわち、大正末期から手がけられて来た、山中湖畔のグラウンド、山荘などが昭和3年にはほぼ完成を見るに至ったし、昭和5年には綱町プールが竣工するなどさまざまな施設の拡充が行われた。しかしながら、何よりも注目しなければならないのは、大学予科の日吉移転とともに進行した、日吉における大規模な体育施設の建設であろう。

昭和5年には、10数万坪の用地が取得され、日吉建設が開始されたわけであるが、昭和9年に至って日吉第1校舎が完成し、5月1日から授業が開始された。それに伴って行われて来た体育施設も、昭和9年には甲種公認の日吉競技場、テニスコート、サッカー場、ホッケー場、日吉弓道場が完成した。翌10年には、体育会日吉事務所および柔剣道場が竣工した。さらに12年には、蝮谷に相撲、空手道場およびボクシングクラブの練習場の完成を見た。そうして、昭和15年に至って、下田に野球場、ラグビー場が新設され、多摩川艇庫の新築が行われた。このようにして、日吉キャンパスの開設とともに、体育会のほとんどの施設が日吉周辺に集中し、偉容を誇るようになり、体育会の活動もまた大きく前進したのである。

この間における体育会の発展はめざましく、各部の活動はますます隆盛となり、ほとんどの部が一時期黄金時代を迎えたといっても必ずしも過言でない状態であった。それを裏づけるものとして、この時期のオリンピック大会における、塾生及びOBの華々しい活躍を挙げる事が出来るであろう。

すなわち、昭和3年にアムステルダムで開催された、第9回オリンピック大会には、OBの三木義雄（陸上）、塾生の津田晴一郎（陸上）、野田一雄（水泳）の3名が出場している。ちなみに、この年の秋には、野球部が東京6大学リーグ戦において完全優勝（10戦10勝）をとげ、それを記念してストッキングに白線1本を加えた年として記憶される年でも

ある。

昭和7年は、慶應義塾創立75年の記念式典が行われた年であるが、第10回オリンピック大会がロスアンゼルスで開催された。この大会には、平沼亮三団長以下実に28名の選手役員が塾生およびOBから参加した。すなわち、佐藤武（本部役員）、三木義雄、小山濠一（陸上役員）、津田晴一郎、北本正路、竹中一郎、小野操、阿武巖夫（陸上）、野田一雄（水上役員）、河石達吾（水泳）、沢海東助、木村清兵衛（水球）、綾井富吉（ボート役員）、南波正吾、高橋六郎、柴田梅太郎、伴紀雄、鈴木大吉、村山又芳、河野四郎（ボート）、石川輝（ボクシング役員）、浅川増吉、浜田駿吉、中村栄一（ホッケー）である。なお、レーク・プラシットでのオリンピック冬期大会にも、塾生帯谷竜一（スケート・フィギュア）が選手として出場している。

さらに、昭和11年のベルリンでのオリンピック大会にも、これまた、平沼亮三団長をはじめ選手役員28名が参加した。浅野均一、平沼五郎（本部役員）、鈴木聞多、今井慶二、大江季雄、今井哲夫（陸上）、根来幸成、原秀夫（水上役員）、宮崎康二、児島泰彦、小池礼三、寺田登（水泳）、和田幸一、高橋三郎（水球）、石川周策（ホッケー役員）、柳武彦、上野安夫、伊藤通弘、浜田駿吉（ホッケー）、右近徳太郎（サッカー）、野坂浩（体操）、吉本裕一（ヨット役員）、財部実（ヨット）の塾生、OBである。また、ガルミッシュ・パルテンキルヘンで開催された冬期大会にも、長谷川次男、渡辺善次郎（フィギュア）、藤野正彦、亀井信吉、吉屋健一（アイスホッケー）の5名の塾生が代表選手として出場している。

もちろん、オリンピック大会のみがすべてではなく、この時期において義塾体育会各部はそれぞれに輝かしい戦績を残し、めざましい活動を行っている。さまざまな客観的状況の急激な変化を考慮に容れなければならないとはいえ、今日の慶應義塾体育会の現状を顧みるならば、いささか今昔の感に耐えず、うたた惜春の思いをいだかないわけではない。しかしながら、こうした体育会の輝かしい歴



（勝情友田西・江大）
昭和11年、ベルリンオリンピック棒高飛での友情のメダル。

史と伝統とは、いまでも脈々として生き続けており、時に応じて華々しく花開くに違いないと信じて疑わない。かつて、筆者が体育会創立75年に際して述べたことであるが、「慶應義塾110年の歴史と、体育会75年の伝統とは、たしかに重いものであろうが、それを支え、それを発展させることは、過去の栄光を荷ない、それを受け継ぐものの責任であり、誇りであると思う」ということを、敢えて重ねて記しておきたい。

さて、このようにめざましく発展を続けて来た体育会も、戦争の激化とともに大きな打撃を受け、衰退することとなった。昭和16年の大戦突入とともに、戦争の影響は次第に体育会の活動にも陰を落とし、衰退の一途をたどったのであるが、昭和17年に至って、在来の学会、文化団体とともに体育会も報国団に吸収されるという事態に陥り、ついにその活動を停止せざるを得なくなったのである。

昭和18年には、学徒動員が行われたのであるが、10月16日には、早大戸塚球場においていわゆる「最後の早慶戦」、出陣学徒壮行のための慶早野球試合が行われたが、それをもって慶應義塾体育会は完全にその活動を停止し、明治25年以来の長く、かつ、輝かしい歴史を中断することとなった。学徒動員によって応召、出征した一人であり、「最後の早慶戦」に文字通り参加した一塾生であった筆者には、その光景はいまなお脳裏に深く刻まれて離れることはない。まさしく、戦争による義塾体育会活動中断の生き証人の一人というべきであろうが、それだけに、こうして義塾体育会のそれまでの歩みを顧みる時に、その歴史の重さをあらためて痛感させられると同時に、そのさらなる発展と飛躍とを心から念願せざるを得ない。

（元体育会理事）